

特別連載

Vol.24

1967年 阪急初優勝時の西本幸雄監督ユニホーム

1960年代のパ・リーグは、近鉄を除く5球団がリーグ優勝を経験しています。1960年から大毎、南海、東映、西鉄が順に優勝、64年から南海が3連覇、67年からは阪急が3連覇を達成しており、この中の異なる2球団(大毎、阪急)を率いて4度の優勝を飾ったのが、西本幸雄監督(1988年殿堂入り)です。

西本幸雄さんは和歌山中(現桐蔭高)出身、立教大では主将を務めました。戦後、49年都市対抗優勝の別府星野組を経て、パ・リーグ初年度の1950年、毎日オリオンズに入団、第1回日本ワールドシリーズの優勝メンバーとなっています。60年には大毎オリオンズ監督に就任、初年度からリーグ優勝を達成するも、日本シリーズでは三原脩監督率いる大洋に4連敗し退任となりました。

62年にコーチとして阪急ブレーブスに入団、63年に監督に就任しました。66年、5位に終わったシーズン終了後、西本監督は選手

に信任投票を求め一旦辞意を表明しましたが、小林米三オーナーの慰留に心を動かされ、留任となりました。『阪急ブレーブス50年史』には、この事件がきっかけとなりフロントとチームが一つにまとまって翌年の優勝につながったと紹介されています。

1967年、米田哲也(00年殿堂入り)、梶本隆夫(07年殿堂入り)、足立光宏ら投手陣と、スペンサーや長池徳二ら打撃陣の活躍もあり、球団創立32年目にして初のリーグ優勝を達成しました。写真は、西本監督の親族よりこの3月に当博物館に寄贈された、この年のユニホームです。『50年史』には西本監督の「最もうれしかったこと」として「67年の阪急初優勝のとき、西京極球場のネット越しに、小林米三オーナーと、指と指とで握手したこと」と紹介されており、大毎(60年)、阪急(67～69、71、72年)、近鉄(79、80年)で計8度リーグ優勝をした西本監督にとって、最も特

別なユニホームと言えるのではないのでしょうか。

